

平成27年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成27年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ケンサキイカ

学名 *Uroteuthis edulis*

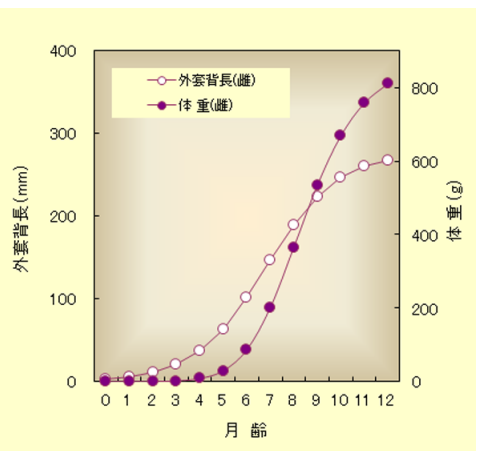
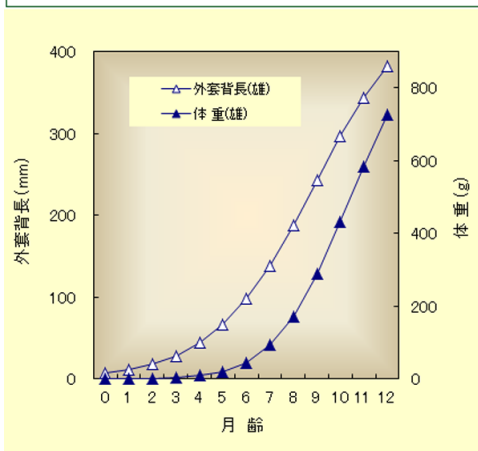
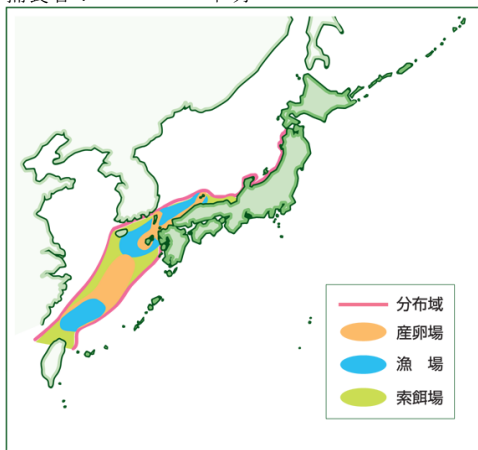
系群名 日本海・東シナ海系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命： 1年
成熟開始年齢： 外套背長7～8cm（約5カ月）
産卵期・産卵場： 周年産卵するが、産卵盛期は春～秋季
索餌期・索餌場： 分布域全体、複数の発生群が存在し、それぞれに回遊経路は異なると考えられている
食性： 小型の魚類、甲殻類、軟体類
捕食者： 不明

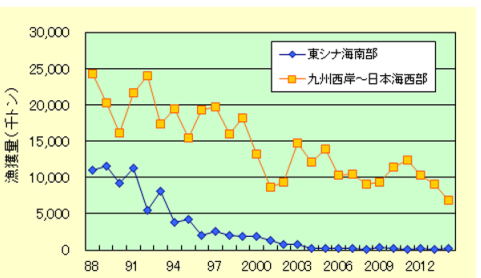
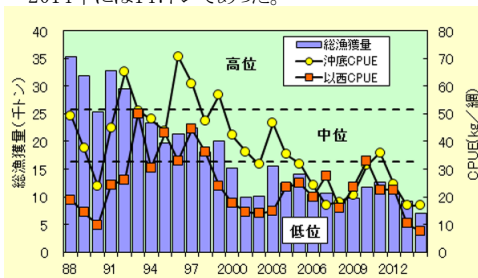


漁業の特徴

沿岸域では主にいか釣り漁業によって漁獲される。沖合域では沖合底びき網漁業(沖底)が主体となり、長崎県沖合～山陰沖の広範囲に漁場が形成される。東シナ海では主に南部で以西底びき網漁業(以西)により漁獲されているが、2004年以降、ほとんど出漁しなくなった。1991年以降は主に東シナ海南部においていか釣り漁船による操業が6～10月にかけて行われている。

漁獲の動向

漁獲量は1988年には3.5万トン余りであったが、減少して2001年以降は1.0万トン前後の漁獲量となっている。2014年は7,000トンであった。海域別でみると、九州西岸～日本海西部にかけては1988年の2.4万トンから変動しながら減少し、2014年は7,000トンであった。一方、東シナ海南部は1988年には1.1万トンの漁獲量であったが、減少が続き、2014年には147トンであった。



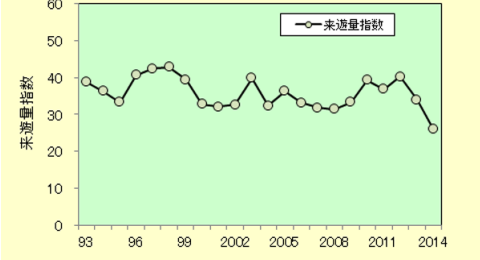
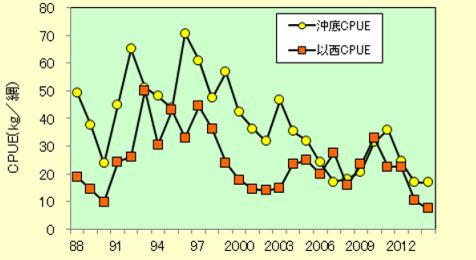
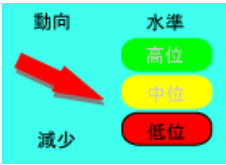
資源評価法

以西、沖底、および沖合、沿岸域でのいか釣り漁業の漁獲動向から資源状態を判断した。沖底ではCPUE(網数あたり漁獲量)を資源動向の指標とした。以西でも努力量が急減していることから、2014年のケンサキイカ有漁漁区について

て過去にさかのぼって漁獲量と努力量を計算し、CPUEの経年変化を分析した。沿岸域については各県代表港のいか釣り漁業CPUEおよび漁獲量を、資源状態の指標とした。

資源状態

2014年には沖底CPUEは前年並みだったが、以西CPUEは前年を下回り、東シナ海南部で主に操業するいか釣り漁業のCPUEは前年を下回った。さらに、各県代表港におけるいか釣り漁業では、漁獲量は長崎県の対馬海域を除いておおむね中～低水準とみられ、最近5年間(2010～2014年)のCPUEの動向は横ばい～減少傾向であった。1988年以降の漁獲量の最小値と最大値の範囲を三等分した値をそれぞれ低位と中位、中位と高位の境界値とし、2014年の漁獲量から資源水準は低位と判断した。資源動向は主要漁業のCPUEを総合して算出した来遊量指数の最近5年間(2010～2014年)の動向から減少と判断した。



管理方策

ケンサキイカ資源には複数の季節発生群が存在することが知られており、豊度の高い発生群を利用し、豊度の低い発生群を守る管理が理想的である。2004年以降はかつて主要な漁場となっていた東シナ海南部に以西がほとんど出漁していないが、この海域には外国漁船も多数出漁している等、東シナ海南部における本資源の漁獲状況は大きく変化している。資源量指標値の変動傾向に合わせて漁獲することを管理目標として2016年ABCを算出した。

管理基準	Limit/Target	F 値	漁獲割合 (%)	2016年ABC (百トン)
1.0・C2014・0.79	Limit	-	-	55
	Target	-	-	44

- Limitは、各漁獲シナリオの下で許容される最大レベルの漁獲量。Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、各漁獲シナリオの下でより安定的な資源の増大または維持が期待される漁獲量
- ABC算定規則2-1) によって、ABCは $ABC_{limit} = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ 、 $ABC_{target} = \alpha \cdot ABC_{limit}$ で計算した
- δ_1 は外国漁船の影響が大きいと考えられることから1.0とした。 α には標準値0.8を用いた
- γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/I)$ で計算をし、kは係数(標準値の1.0)、bとは資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間(2012～2014年))

資源評価のまとめ

- 資源水準は低位、動向は減少
- 2004年以降以西は東シナ海南部漁場にほとんど出漁せず、この海域における漁獲量が落ち込んだ

管理方策のまとめ

- 現状では資源量の指標値に合わせて漁獲を行なうことを管理目標として、ABCを算出した
- 豊度の高い季節発生群を利用し、豊度の低い季節発生群を獲り控えることが重要
- かつて日本漁船の主漁場であった東シナ海南部では多数の外国漁船が出漁しており、高い漁獲圧がかかっている可能性がある

執筆者: 依田真里・福若雅章

資源評価は毎年更新されます。